

英語韻律詩における無冠詞単数可算名詞について

メタデータ	<p>言語: Japanese</p> <p>出版者: 静岡大学学術院教育学領域</p> <p>公開日: 2018-06-25</p> <p>キーワード (Ja):</p> <p>キーワード (En):</p> <p>作成者: 丸山, 修</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	https://doi.org/10.14945/00025350

英語韻律詩における無冠詞単数可算名詞について

Bare Singular Count Nouns in Metrical Poems

丸 山 修

Osamu MARUYAMA

（平成 29 年 10 月 2 日受理）

Abstract

There are quite a number of cases of singular count nouns used without articles in well-known metrical poems written in the early modern to post-Romantic periods, a fact often overlooked by scholars. Many of these cases can be regarded as exceptional means of accommodating to the needs of regular meters, much like the well-documented omissions, inversions and elisions, but whether the absence of an anticipated article causes a far from negligible difference in each poem's intended meaning must be carefully examined against its unique context. In this paper, typical cases of the use of bare singular count nouns—as prepositional objects, even when modified by idiosyncratic attributive adjectives; or appearing in pairs or groups, generally suggesting relatedness between the nouns—are illustrated with lines from poems in regular meters, and suggestions about how to read a meaning creatively into the form are given.

1. はじめに

次の文章は伝統的な韻律に則って書かれた著名な詩の一節だが、可算名詞の単数形に冠詞が伴っていない箇所が見られる。

- (1) For we cannot help agreeing that no living human being
Ever yet was blessed with seeing bird above his chamber door—
Bird or beast upon the sculptured bust above his chamber door,

(Poe, "The Raven" ll. 51-54)¹

この詩は trochaic octameter を用いているが、この詩句のまま冠詞を付加すると、当然ながら韻律が乱れてしまう。裏を返せば、韻律を整えるために冠詞を省いたと見ることが出来る。ただし、“Bird or beast”のような無冠詞名詞を並列する方法は、詩だけに観察されるわけではない。² 一方、2行目の“seeing bird”は明らかに奇異である。Poeはなぜ冠詞を省いたのだろうか。ただ単に韻律を考慮した結果、無冠詞という形態が生じてしまったのだろうか。それとも別の根拠があって無冠詞という形態の選択に至ったということだろうか。この詩に限ったことではないが、そもそも冠詞の省略は韻律調整法として認知されているのであろうか。そうだとすれば、どの

ような条件で使われるのであろうか。

冠詞、特に定冠詞の、詩もしくは広く文学作品における使用については、たとえば既知の文脈という印象を読者に与える効果に触れた論考は少なくない（Widdowson 7-13; Trotter 113-34; Verdonk 121-22; Semino 15-30）が、冠詞の不在について体系的に論じられることはまずない。そこで本稿では、比較的馴染み深い韻律詩からいくつかの実例を取り上げ、どのような傾向が見られるかを確認した上で、この形態が作品の解釈に及ぼす影響についてささやかながら示唆を試みたい。詩全般における冠詞の省略にはさまざまなケースがあり、それらを一様に扱うことは、詩の読み方を損ねてしまう可能性もある。韻律との関係が推認されるケースを切り分けることによって、詩の意図のより正確な把握に資することが出来るのではないかと考える。³

2. 韻律調整のための特殊操作

文脈上予期される冠詞の不在を取り上げる上での背景として、詩における特殊構文に触れておく必要がある。詩、ことに韻律詩においては、散文では通常見られないような倒置や省略などの手法を用いることがある。これらは、もともと韻律を調整したり、脚韻を踏めるようにしたりするという役割を持つものだが、結果として、格調や深い意味合いなどをもたらす詩特有の文体的特徴ともなっている。具体例は枚挙に暇がないが、John Donneのよく知られるソネットの一つにこのような詩行がある。

(2) From rest and sleep, which but thy pictures be,

Much pleasure; then from thee much more must flow, (“Death be not proud” ll. 5-6)

2行にわたる最初の文と、セミコロン以下の2行目の残りの部分は並列の関係になっており、人間が休んだり眠ったりしているようすが、「お前」と呼びかけられている死を写した絵（“pictures”）であることから、一方から得られる喜びが他方からも流れ出てくるという内容である。両方ともfromに導かれた句が先行し、主語が続くという点は共通だが、pleasureは前の文だけに現れ、逆に動詞のflowは後ろにしかない。Pleasureの繰り返しを避けたのは英語として自然だが、この動詞の意外な配置に関しては、ソネット特有の押韻という理由はもちろんあるが、加えて次のような説明が可能である。すなわち、前の文では、休息や睡眠から喜びが得られることは経験済みの事実として述べられており、法助動詞mustを使うのはおかしいので、後ろの文で動詞として含意されていたflowをmustとともに書き出したということであろう。⁴ このように特異な省略や倒置は、読者が読み流してしまうのを拒み、詩の内容を噛みしめるよう促す働きを持つ。

一方で、専ら詩行を構成する音節の数を調節することが目的と考えられる音韻上の工夫も見られる。これは英語の文芸詩の伝統において、詩行の音節数を厳密に統制することが重要と考えられたことの表れである。少なくともロマン主義以前の近代の英詩においてとりわけこの傾向が強かったのは、Steele（1999）の見立てによれば、詩人たちが、言わば英語の音韻的性質に逆らって、英詩をギリシア・ローマの古典詩の流れをくむ大陸のロマンス詩の系譜に位置づけたことが要因である。古典詩の韻律は音節の長短（quantity）に基づく複雑なシステムの上に成り立っていたが、その音声的特徴が廃れて感じ取れなくなってしまったために、強弱の音節の数を揃える操作で置き換え、古典詩の精密さに近づこうとした（134-36）。対照的に、中世に古英語で作られた頭韻詩は、各行強拍に当たる音節が一定数あるのに対し、弱拍の音節数にばらつきがあるが、リズムの変化は当然あるものの、それが韻律を乱すとは認識されてい

かったと考えられる。弱拍の柔軟な扱いは、英語が現在の形に変化しても受け継がれている特徴であり、ロマン主義時代の詩人たちによって見直されたバラッドなどの民俗詩（または民謡）のなかに根強く生き残ってきた。ロマン主義以前の文芸詩は、表向きはそうした傾向に逆らいつつ、実は英語の音韻的柔軟性を縦横に利用し、音節数を守るための様々な工夫を編み出してきたのである。

こちらの例も、Donneのソネットから挙げてみる。⁵同じソネットでは、“think’st”や“swell’st”が見られる。これらはthouを主語とするときの動詞の屈折語尾-estの母音を脱落させる常套的な操作であるが、Donneはほぼ一貫してこの形を用いている。また、

(3) Thou art slave to fate, chance, kings, and desperate men (l. 9)

(4) And poppy or charms can make us sleep as well (l. 11)

という2行においては、それぞれ下線を施した前後2語が母音で連続しているが、これらはひとかたまりの音節として捉えられている（前者は“Th’art”や“Thou’rt”といった縮約形も使われる）。さらに、desperateはこの詩の韻律に照らせば、真ん中の曖昧母音を省略した、desp’rateのような2音節としての発音で扱われていることがわかる（この単語に限らず、縮約された発音をそのまま表すような綴りもしばしば使われる）。これらは、必要に応じて使われる手段であり、詩人が（もしくはその当時の人々が）どう発音していたかとは関係なく、条件が異なれば省略しない形が使えるからこそ役に立つ。そのほか、この詩ではそのまま短縮することなく使われている“overthrow”は、別のソネットでは“o’erthrow”という短縮形で2音節に扱われている。このvを省いた形は、over, ever, evenという綴りを含む特定の単語にだけ頻繁に使われ、⁶一般に伝統的な詩に特徴的な語形と認識されているが、そのほかの例は、曖昧母音などの英語の音韻現象から導き出される自然な音節調整と言って良いだろう。厳格な詩形に言葉をはめ込んでいく際に、こうした音声上の遊びを活かしたというのは、皮肉とも言える。

3. 韻文における冠詞の音韻上の位置づけ

単語や音節の省略によって詩の意味が損なわれることを想定する詩人はいないだろう。単語そのものは変えず、音だけを短縮したり省略したりすることは、詩が韻律を規則的に保てるかどうかを左右するが、それが意味の違いをもたらすことはないし、文体への影響にしても、倒置や単語自体の省略に比べれば小さい。逆に言えば、意味的機能が無視できるほど小さい単語であれば、音節調整のために省略される可能性があるのではないかという予測が立てられる。冠詞はそれが限定する名詞が指す事物の存在様態に言及するが、詩の意味内容に対する貢献度は内容語に比べてはるかに小さいため、どちらかを犠牲にしなければならないとすれば、冠詞が対象になるのは当然である。実際、中英語の韻文においては、樋口（2009, 16-18）が示しているとおりに、冠詞の有無が韻律との整合性に左右されていると見られる例がいくつもある。しかし、冠詞が発達段階だった中英語において言えることが、現代英語でも当てはまるかどうかは検証する必要がある。そもそもなぜ冠詞を省く必要が生じるのか、韻律上の仕組みを整理してみよう。

冒頭の(1)は、強弱2種類の音節が一つずつ交互に現れる韻律を持っている。定冠詞にせよ不定冠詞にせよ、文において強勢を担うことは通常ないので、冠詞が強拍の位置に来るのは自然な言語のリズムに逆らうことになる。適当な冠詞（斜体字で表す）を一旦補って、該当するうちの1カ所を前後数語にわたって取り出すと、次のようになる。

(I) with seeing a bird above his chamber

追加された冠詞は強勢のない音節と隣り合い、かつ、この2音節が強勢のある音節（下線部）に挟まれる形になっている。この配列は2音節フット（iambまたはtrochee）のみでは分析できない。必ず前後どちらかの強拍とセットになって3音節フット（anapestまたはdactyl）を構成すると考えるほかはない。ただし、3音節フットと捉えなければ韻律が崩れてしまう原因は、冠詞が別の弱音節と隣り合ったこと自体ではなく、そこから左右両側に向かって強弱が交互に来るという配列ができてしまっていることである。2音節フットの詩で弱音節が連続しても、韻律上許される配列もある。たとえば、Andrew Marvellに次の有名な一節がある。

(5) To a green thought in a green shade. (“The Garden” l. 48)

この詩はiambic tetrameterで書かれているが、この行を構成する8音節は、順に弱弱強強弱弱強強（4音節ずつに割ると、それぞれpyrrhicとspondeeの組み合わせとみなすか、まとめてdouble iambと呼ぶこともある）となるが、iambのリズムに辛うじて逆らっていないために許容されている。⁷

定冠詞については、すでに見た曖昧母音の脱落という方法を使って、冠詞そのものを省略せずに1音節圧縮する操作が見受けられる。まず、次の単語が母音で始まる場合は、/ð/という子音が母音に被さるような形になる。母音に強勢がある場合もない場合も同様に可能である。George Herbertから、それぞれの例を一つずつ引く。

(6) Makes that and th'action fine. (“The Elixir” l. 20)

(7) Engine against th'Almighty, sinner's tower, (“Prayer (I)” l. 5)

さらに、まれに子音の前でもこの脱落が行われることがある。ただし、この場合はほぼ例外なく前置詞に後続していて、前置詞も短縮されているように表記されることが多い。典型的な例を挙げる。

(8) To seek i' th' valley some cool friendly spring. (Milton, *Comus* l. 282)

(9) Fear'd her stern frown, and she was queen o' th' woods. (Milton, *Comus* l. 446)

(10) Made thee in rags, halting to th' press to trudge,

(Bradstreet, “The Author to Her Book” l. 5)

とくに子音の前の脱落については、実際にはanapestを限りなくiambに近く発音することを表しているにすぎない。ただ、重要な点は、弱く発音できる前置詞との組み合わせという条件であり、同じ方法は上の(I)の例では使えない。もう一つ言えることは、不定冠詞に関しては、母音を脱落させることは、冠詞まるまる一つを消し去ることにほかならないので、この方法は無効ということである。

4. 韻律詩における無冠詞用法の事例

(8)～(10)の例のように、前置詞と冠詞が続くことは英語ではしばしば起こることであり、2音節フットとは相性が良くない。もしこの状況で定冠詞の働きが無視できるのであれば、母音の脱落だけでなく、もう一步進めて定冠詞の形跡を取り除いてしまうことも自然な流れである。慣用句では前置詞と可算名詞が冠詞なくして連なることがよくある。実際、韻律詩においては、慣用句とまでは言い切れない前置詞句でも、慣用句に準じて冠詞を用いない例が散見される。

(11) on leathern Wing (William Collins, “Ode to Evening” l. 10)

- (12) in oblivious host (John Clare, "I Am" l. 4)
 (13) with patient look (Keats, "To Autumn" l. 21)
 (14) in wonted way (Wilde, "The Ballad of Reading Gaol" l. 410)
 (15) On lissom, clerical, printless toe (Rupert Brooke, "The Old Vicarage, Grantchester" l. 63)
 (16) at close of day (William Cowper, *The Task* Bk. 4 l. 311; Dylan Thomas, "Do Not Go Gentle into That Good Night" l. 2など)

(11) ~ (15) は、いずれも行末に位置していて、押韻の必要が生じるため名詞は単数形のままだが、形容詞による限定があるにもかかわらず無冠詞である。(16) は at the close of day が普通だが、Cowper の場合は fields、Thomas の場合は rave と、いずれも強拍の後ろに位置するため、at を弱拍にする必要がある。樋口 (2009, 57-61) は、このような前置詞のあとの冠詞の不使用は、中英語では特に韻文において顕著な具体的特徴の一つであると指摘しているが、現代英語の詩でも例が多数あるということは、韻律の影響はかなり大きいと考えられる。

一般に無冠詞の単数形可算名詞が使用される条件で顕著なのは、二つ以上の名詞が and や or で結ばれ (列挙され) たり、特定の前置詞と共に慣用句を形成する場合であり、⁸ 韻律詩においても相当数に上る例が観察できるが、詩ならではの創造的な応用がされることも少なくない。韻律への影響という観点のみで判断すれば、冠詞の存在は一概に有利とも不利とも言えず、韻律上規則的であることと総合的な詩の響きの良さは必ずしも一致するわけではない。次の数例のように、そもそも iamb のリズムを際立たせるのに冠詞は好都合である。

- (17) And with a stronger faith embrace
 A sword, a horse, a shield. (Lovelace, "Song: To Lucasta, on Going to the Wars" ll. 7-8)
 (18) Oh, lift me as a wave, a leaf, a cloud! (Shelley, "Ode to the West Wind" l. 53)
 (19) On a round ball
 A workman that hath copies by, can lay
 An [sic] Europe, Afric, and an Asia, (Donne, "A Valediction of Weeping" ll. 10-11)
 (20) But there is no sleep when men must weep
 Who never yet have wept:
 So we—the fool, the fraud, the knave—
 That endless vigil kept, (Wilde, "The Ballad of Reading Gaol" ll. 259-62)

(19) は固有名詞に対してあえて冠詞を使うことで、リズムを整えている。(20) については、詩の別の箇所では、3 項一組ではないものの、次のように冠詞を使わない方法が用いられている。

- (21) And we forgot the bitter lot
 That waits for fool and knave, (ll. 231-32)

どちらの方法でも韻律上問題がないとすれば、無冠詞用法を選ぶ背景には韻律以上の要素があることは明白である。以下、具体例からもう少し踏み込んで検討してみる。

まず、単独の名詞がペアになっている場合である。例を挙げる。

- (22) Cannon to right of them,
 Cannon to left of them,
 Cannon behind them
 Volleyed and thundered;

- Stormed at with shot and shell,
While horse and hero fell,
They that had fought so well
Came through the jaws of Death,
Back from the mouth of Hell, (Tennyson, "The Charge of the Light Brigade" ll. 39-47)
- (23) Out upon the wharfs they came,
Knight and burgher, lord and dame, (Tennyson, "The Lady of Shallot" ll. 159-60)
- (24) Rich Diamond and Pearl and Gold
In every Place was seen;
Rare Splendors, Yellow, Blue, Red, White, and Green,
Mine Eyes did everywhere behold, (Traherne, "Wonder" ll. 41-44)
- (25) In mist or cloud, on mast or shroud,
It perched for vespers nine; (Coleridge, "The Rime of the Ancient Mariner" ll. 75-76)
- (26) Yet them nor Peer nor Prince can buy,
Till Cherry ripe themselves do cry. (Campion, "There is a Garden in her face" ll. 11-12)
- (22) の "shot and shell" は同義語で、砲弾の雨あられを指し、"horse and hero" は、人馬一体を表す表現 (hero という単語の選択は Tennyson 独自の工夫だが、rider など置き換え可能) だが、両方とも関連性のある組み合わせと言える。また同様に、(23) の 2 行目の前後 2 組のペアは対義語どうしと言って良いであろう。以上の名詞はすべて単数形であるが、文脈からも、実質的には同種のものが複数存在することを強くにじませている。しかしながら、たとえば、"with shots and shells" とはなっていないのは、上の (11) ~ (15) 同様、単数形と複数形で韻を踏むことのほうが詩としてより重大な不備と認識されていたことを示すものと考えられる。(24) には三つの宝石・貴金属の組み合わせが見られるが、"splendors" をはじめ、詩の随所に現れる同種のものの多くが複数形になっており、内容から見れば、単数形が普通の gold は別としても、diamond や pearl は複数形であってもおかしくない。(25) は or を使った例であるが、やはり関連性のある単語どうしをペアにしている (shroud は mast を固定するために張るロープである)。冒頭の (1) の "Bird or beast" も同じ要領である。最後の (26) は否定の例である。
- 名詞どうしが and や or で直接結ばれていなくても、関連性が明確に意図されていれば、無冠詞で用いられることもある。
- (27) Then, in the blazon of sweet beauty's best,
Of hand, of foot, of lip, of eye, of brow, (Shakespeare, Sonnet 106 ll. 5-6)
- (28) Slain by the bloody Piemontese that roll'd
Mother with infant down the rocks. (Milton, "On the late Massacre in Piemont" ll. 7-8)
- (29) Over meadow, over mountain,
Over river, hill, and hollow. (Longfellow, *The Song of Hiawatha* X. ll. 225-26)
- (30) He was a gentleman from sole to crown, (Robinson, "Richard Cory" l. 3)
- ここまでは、詩以外においても類例が観察可能であるが、特徴的な形容詞を伴う場合でも、名詞句が無冠詞である例が詩においては見られる。むしろ、名詞単独ではペアとは見なしにくい、名詞句として関連性を示唆しているというほうが適切であろう。
- (31) Can storied urn or animated bust

Back to its mansion call the fleeting breath?

(Gray, "Elegy Written in a Country Churchyard" ll. 41-42)

(32) With monstrous head and sickening cry (Chesterton, "The Donkey" l. 5)

(33) The only other sound's the sweep

Of easy wind and downy flake. (Frost, "Stopping by Woods on a Snowy Evening" ll. 11-12)

(34) Their proper habits vaguely shown

As jointed armour, stiffened pleat, (Larkin, "An Arundel Tomb" ll. 3-4)

(32) と (33) は、上に述べた前置詞との組み合わせも関係しているかもしれない。(33) の "flake" は雪片 (snowflake) のことだが、見た目は似ていても sugar のように単数形で使うことはまずなく、Frost 自身もこれ以外の作品では複数形を用いている。(34) は、中世の男女が眠る墓の彫像の描写だが、男性が身につけている "armour" は服装というよりは、戦闘に備える不定形の防具であり、不可算である。一方、"pleat" は女性の服装の特徴の一部に焦点を当てた選択であろうが、通常は複数が集まって服装を構成するものである。しかしながら、両方とも過去分詞から転じた形容詞で限定し、並列な関係に見せることによって不自然さを和らげている。

(29) のような、特に場所や地形を表す単語については、通常可算名詞として扱われるものも多いが、しばしば複数の地形的特徴を列挙する際に無冠詞のままで使われる。⁹

(35) ... sweet interchange

Of hill and valley, rivers, woods, and plains,

Now land, now sea, and shores with forest crowned,

Rocks, dens, and caves; (Milton, *Paradise Lost* Bk. 9 ll. 115-18)

(36) Never did sun more beautifully steep

In his first splendor valley, rock, or hill;

(Wordsworth, "Composed upon Westminster Bridge, Sept. 3, 1803" ll. 9-10)

(37) Through wood and dale the sacred river ran, (Coleridge, "Kubla Khan" l. 26)

(38) ..., and fill

(Driving sweet buds like flocks to feed in air)

With living hues and odours plain and hill: (Shelley, "Ode to the West Wind" ll. 10-12)

(39) They faint on hill or field or river: (Tennyson, "The Splendour Falls" from *The Princess* l. 14)

(40) Shaken out dead from tree and hill (D. G. Rossetti, "The Woodspruge" l. 2)

(35) は一見単数形と複数形が混在していて奇異に映るが、単数形どうし、複数形どうしを、それぞれに and を使って別々にグループ化している以上、まったく同列に捉えるのは乱暴と言えよう。ただし、一般論として、それらをどのような意図で使い分けているのかは一概には言えない。その点で興味深いのは (36) である。この箇所は、田舎で見た美しい朝日を引き合いに出して、都会の朝日が引けを取らないことを言おうとしているのだが、先行する詩行では、都会の景観を構成する人工物を、"Ships, towers, domes, theaters, and temples" (l. 6) のように複数形で列挙している。スケール感が違うとは言え、景観の対比を印象づける効果がある。また、一連の例を見てもわかるが、複数の詩人が使っている単語どうしの意味的関連性は、詩行において実際に選択された単語の組み合わせにそれほど影響を与えているようには感じられない。つまり、詩人の発想によって、どのようにも組み合わせが可能と考えられる。

5. 形態を読み解く

無冠詞可算名詞の用法自体は例に事欠かないし、新聞の見出しなどや、詩のなかでも実験的・前衛的な作品において、文体的特色として意図的に用いることがあるのは言うまでもない。また、韻律詩のなかに現れるからと言って、すべてが韻律との関係を窺わせるものとは言えない。たとえば、呼びかけの名称には冠詞は使わないが、呼びかけは詩には不可欠な手法と言っても良いだろう。Keatsの“To Autumn”は、秋を擬人化し、次のように呼びかけて始まる。

(41) Season of mists and mellow fruitfulness,

Close bosom-friend of the maturing sun; (ll. 1-2)

本稿では、韻律に厳密さを求めるタイプの詩に特有と考えられる特徴的な用法を具体例によって描き出そうと試みた。これらは標準的な慣例から外れている部分もあるが、いくつか共通の傾向が見られ、決してランダムに行われているわけではないことが強く示唆される。一方、仮に特定の詩句と韻律が衝突した場合、冠詞の省略がつねに取り得る最善の解決法というわけではない。韻律の都合という要素は大きいとしても、詩人が無冠詞という方法を選んだのには、そこに何かしら表現上有利な点があるという認識や感覚があったと想定すれば、より深い読みが出来るかもしれない。そこで最後にこの観点から、冒頭の(1)についてもう少し踏み込んで検討してみよう。

この詩は、タイトルにもなっているオオガラスが重要な役割を果たしているが、闇夜に現れ詩の話者をあざ笑うかのように“Nevermore”という言葉だけを発するという不気味さとは裏腹に、あくまでも現実的な存在として描かれている。愛する女性を失った悲しみに沈む話者が、そのカラスに色々な思考や記憶や空想を重ね合わせるが、カラス自体は素っ気ない反応を繰り返し、謎に包まれたままである。“Bird”という単語は言うまでもなくこのカラスを指しているが、話者はその正体を邪推していく際に、“bird or devil” (ll. 85, 91), “bird or fiend” (l. 97) というパターンを使っている（ただし、後者は呼びかけではあるが）。もちろん、話者は直感的にはカラスを鳥として捉えているので、直示的に“this ebony bird” (l. 43) や“this ungainly fowl” (l. 49) のようなフレーズを使っているが、このカラスの本質を省察しようとする、それが鳥の具体例であることを内心疑っているために、不定冠詞の使用を避けたと解釈することも可能である。さらに、“bird”を無冠詞で用いている箇所がもう一つあり、カラスが止まった部屋の一角に話者が近づいて腰掛けようとする描写のなかで、(1)でも言及されている存在物を列挙して、“bird, and bust and door” (l. 68) としている。すでに言及している対象なので、普通は定冠詞の使用が見込まれるのにそうならないのは、ここでははっきりと個々のものを認識しているのではなく、三つの関連性に焦点化しているのだと考えられる。これらは、慣用的に関連づけて語られるものではなく、詩が作り上げた文脈を積極的に利用したからこそその表現だと言えよう。

冠詞の有無や使用する冠詞の種類は、詩の意図の解釈に影響を及ぼすことは疑う余地はない。しかし、それがどのような具体的意味の違いを生み出すかは、その詩の内容に掛かっており、一概に記述することは難しい。無冠詞という形態は、顕在的な冠詞に比べれば見過ごしやすいものだが、そこに何が隠れているかを探ることは詩の読み方を広げる可能性を秘めているのではないだろうか。

注

1. 詩作品からの引用については、基本的に文献リストに挙げた書籍のテキストを用いたが、

大部分がインターネット上で検索可能であるため、読者の便宜を図り、作品名と行番号を記した。また、古い綴りについてのみ、支障がない限り現代のものに改めた。アンソロジーからの引用については、(10)、(30)はEllmann、(17)はFowlerからである。

2. 樋口 (2003, 377) の例を参照。
3. 本稿は詩におけるさまざまな用例の仕組みを文法的に解明することが目的ではない。たとえば、一般的英語使用において無冠詞名詞の代表例を挙げ、統語的解釈や、前置詞の後など特定の文脈でどのような含意を持つかを分析している Stvan は、詩における事例を理解する上で役立つ示唆を与えてくれる。なお、可算名詞という用語については議論があるが、本稿は便宜上、通例可算扱いされる名詞を指して使っている。
4. それならば、flow を先に単独で一度だけ使い、From rest and sleep, which but thy pictures be, much pleasure flows; then must from thee much more, という語順も考えられる。もちろん、押韻がなくなってしまうので、実際にはそのまま置き換えて済むわけではないが、詩行の与える印象は大分異なる。たとえば、元の詩行では、前の文で本当に flow が省略されていたのかは断言できない。
5. Donne の手法については、Wright 265 を、他の例は Preminger and Brogan の “METRICAL TREATMENT OF SYLLABLES” の項を参照のこと。
6. この音の脱落の仕組みについては Wright 152 を参照のこと。
7. Double iamb および、この行の捉え方の機微については、Wallace 26-28 を参照のこと。Attridge はフットを用いない分析でこの組み合わせの説明をしている (120-22)。
8. 樋口 (2003) 103-10, 374-78 を参照のこと。
9. 樋口 (2003, 114-21) は地形を表す語の意味内容に空間的範囲の限定が含意されない場合に無冠詞で用いられることを例示している。ここではあくまで 2 語以上の組み合わせを論じる。

参考文献

- Attridge, Derek. *Poetic Rhythm: An Introduction*. Cambridge: Cambridge UP, 1995.
- Brooke, Rupert. *The Collected Poems of Rupert Brooke with a Memoir*. London: Sidgwick & Jackson, 1918.
- Campion, Thomas. *The Works of Thomas Campion: Complete Songs, Masques, and Treatises with a Selection of the Latin Verse*. Ed. Walter R. Davis. London: Faber, 1969.
- Chesterton, G. K. *Chesterton's Stories, Essays & Poems*. With Introduction by Maisie Ward. London: J. M. Dent, 1957.
- Clare, John. *Selected Poems*. Ed. James Reeves. London: Heinemann, 1954.
- Coleridge, Samuel Taylor. *Coleridge: Selected Poems*. Ed. Richard Holmes. London: HarperCollins, 1996.
- Cowper, William. *The Poetical Works of William Cowper*. 4th ed. Ed. H. S. Milford. London: Oxford UP, 1934.
- Donne, John. *John Donne's Poetry*. 2nd ed. Ed. Arthur L. Clements. New York: Norton, 1992.
- Ellmann, Richard, ed. *The New Oxford Book of American Verse*. New York: Oxford UP,

1976.

Fowler, Alastair, ed. *The New Oxford Book of Seventeenth Century Verse*. Oxford: Oxford UP, 1992.

Frost, Robert. *Poetry and Prose*. Ed. by Edward Connery Lathem and Lawrence Thompson. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1972.

Gray, Thomas, and William Collins. *Poetical Works*. Ed. Roger Lonsdale. Oxford: Oxford UP, 1977.

Herbert, George. *The Poems of George Herbert*. Ed. F. E. Hutchinson. London: Oxford UP, 1961.

樋口昌幸『例解現代英語冠詞事典』大修館書店、2003。

樋口昌幸『英語の冠詞—歴史から探る本質—』広島大学出版会、2009。

Keats, John. *The Poetical Works of John Keats*. 2nd ed. Ed. H. W. Garrod. Oxford: Clarendon, 1958.

Larkin, Philip. *The Whitsun Weddings*. London: Faber, 1964.

Longfellow, Henry Wadsworth. *The Song of Hiawatha*. With Introduction by H. B. Cotterill. London: Macmillan, 1925.

Marvell, Andrew. *The Complete Poems*. Ed. Elizabeth Story Donno. Hamondsworth: Penguin, 1976.

Milton, John. *Comus and Other Poems*. Ed. F. T. Prince. Oxford: Oxford UP, 1968.

----. *Paradise Lost*. Ed. William G. Madsen. New York: Random House, 1969.

Poe, Edgar Allan. *Complete Poems and Selected Essays*. Ed. Richard Gray. London: J. M. Dent, 1993.

Preminger, Alex, and T. V. F. Brogan, eds. *The New Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*. Princeton, NJ: Princeton UP, 1993.

Rossetti, D. G. *The Poetical Works of Dante Gabriel Rossetti*. New ed. Ed. William M. Rossetti. Folcroft, Pa.: Folcroft Library Editions, 1977.

Semino, Elena. *Language and World Creation in Poems and Other Texts*. 1997. London: Routledge, 2014.

Shakespeare, William. *Shakespeare's Sonnets*. Ed. Stephen Booth. New Haven: Yale UP, 1977.

Shelley, P. B. *Poetical Works*. Ed. Thomas Hutchinson. London: Oxford UP, 1943.

Steele, Timothy. *All the Fun's in How You Say a Thing: An Explanation of Meter and Versification*. Athens: Ohio UP, 1999.

Stvan, Laurel Smith. "The Semantics and Pragmatics of Bare Singular Noun Phrases." Ph.D. Dissertation. Northwestern University. 1998.

Tennyson, Alfred. *The Poems of Tennyson*. Ed. Christopher Ricks. London: Longmans, 1969.

Thomas, Dylan. *Collected Poems 1934-1953*. Ed. Walford Davies and Ralph Maud. London: J. M. Dent, 1988.

Traherne, Thomas. *Centuries, Poems, and Thanksgivings*. Vol. 2. Ed. H. M. Margoliouth.

- Oxford: Clarendon, 1958.
- Trotter, David. *The Making of the Reader: Language and Subjectivity in Modern American, English and Irish Poetry*. London: Macmillan, 1984.
- Verdonk, Peter. "Poetry and public life: a contextualized reading of Seamus Heaney's 'Punishment.'" *Twentieth-Century Poetry: From Text to Context*. Ed. Peter Verdonk. London: Routledge, 1993. 112-33.
- Wallace, Robert. "Meter in English." *Meter in English: A Critical Engagement*. Ed. David Baker. Fayetteville: U of Arkansas P, 1996. 3-42.
- Widdowson, H. G. *Stylistics and the Teaching of Literature*. London: Longman, 1975.
- Wilde, Oscar. *Selected Poems of Oscar Wilde*. 12th ed. London: Methuen, 1919.
- Wordsworth, William. *Poems, in Two Volumes, and Other Poems, 1800-1807*. Ed. Jared Curtis. Ithaca, NY: Cornell UP, 1983.
- Wright, George T. *Shakespeare's Metrical Art*. Berkeley: U of California P, 1988.